

[水嶋クリニックでのパーキンソン病治療]

効果を持続させるために ～東洋医学的病態把握と鍼治療

Parkinson's disease treatment in Mizushima Clinic : To maintain continued effect of treatment

みずしま たけお
水嶋クリニック院長 **水嶋 文雄** 先生 | MIZUSHIMA Takeo
(インタビュー：編集部／2017年9月20日 水嶋クリニックにて収録)



近年、パーキンソン病の患者さんが急増しています。高齢の方のみならず3、40代、ひいては20代と、若年での発症も少なくありません。現状では、死因となることはないものの、治癒する可能性もないことから、生涯抱え続けなければならない疾患として、いかに患者さんのQOLを低下させず保持するかが医療の課題となっています。そこで、長年にわたり治療を続けてこられた水嶋文雄先生に治療法と課題について伺いました。

「パーキンソン病の治療といえば、「水嶋先生」と連想されるような印象を持っていましたが、そもそもパーキンソン病に特化したクリニックではなかったのですね。

水嶋：昨年(2016年) お亡くなりになった安保 徹先生へパーキンソン病の症例を提供したのがきっかけで、安保先生との共著(『パーキンソン病を治す本』マキノ出版2003年刊)が出版されると、パーキンソン病の患者さんやご家族からの問い合わせが急に増えたのです。

元来、私はプライマリケア医を目指し、過疎化している地方の診療所を希望していたので、ご高齢の方の肩や腰の痛みには鍼灸は絶対必要だろうと、医学生の中から兵頭正義先生の下で勉強しました。開院前の病院でのローテート(研修医)時代には北京中医薬大学へも行かせてもらい、現代中医学と、老中医から理論や手技を学びました。

「先生のパーキンソン病への鍼灸治療と題する講演を2度お聴きし、治療の重要なポイントに鍼灸があることがわかりましたが、1、2時間程度では診断や治療法を理解するのは難しく、しかもかなりの知識が必要ですね。

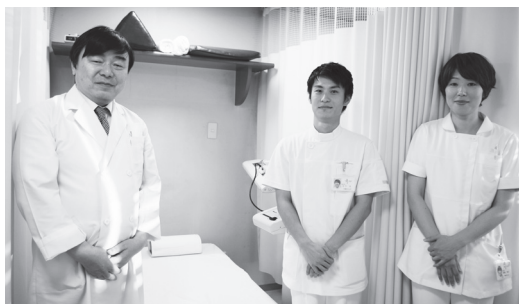
水嶋：講演では確かにそうだと思います。時間も短く、僕もきちんと伝えられないです。本来、座学だけでなく、実際の臨床を交えてレクチャーしたいのです。

私のクリニックには信州大学医学部の学生が研修で入っていますが、彼らは歩くことができなかった患者さんが歩いて帰られたりするのを見て、びっくりします。これが鍼の効果だよと言うと、喜んで帰っていきます。

「鍼灸治療は鍼灸師さんに任せておられるのですか？」

水嶋：私もしますが、そうすると、どうしても患者

さんが私を指定してきて診療が滞るので、基本的に鍼灸室に行ってもらいます。もちろんクリニックと連携を取って治療しますし、毎日、研修や症例検討をしています。鍼灸治療室はNPO法人東洋医学研究所所属となっています。



鍼灸治療室の研修生（鍼灸師）とともに

パーキンソン病の患者さんには 膈不通がある

一では、パーキンソン病の者さんへの鍼灸治療について具体的に伺いたいと思います。まず診断ですね。ポイントからお願いします。

水嶋：先ほど申し上げた本を出版した後、パーキンソン病の患者さんが急増し、これはきちんとした治療をしていかないといけないと、いろいろ調べました。すると、ほとんどの患者さんには膈不通があることがわかったのです。そのことは江部洋一郎先生の経方理論とぴったり合致し、膈不通から治療していくと非常に良くなったわけです。なぜ良くなって

いくのか調べていくと、鍼灸治療がドパミンの補完効果があることが、ヤール度の変化(図1)とDAT-SCANでわかりました。

一江部洋一郎先生はこの5月にお亡くなりになられましたね。『経方医学』が東洋学術出版社から出されています。その理論が合致するというのですが、少し説明をお願いします。

水嶋：パーキンソン病の東洋医学的メカニズムを提唱しているのが江部洋一郎先生で、その理論が経方理論です。これは生体の気の流れを解説したもので、先天の気である腎気は後天の気である胃気と脾気をとめない横隔膜を貫き、肺気の宣発作用にて皮膚の表皮に流れる気と心気と心包気になります。心気は心血となり、心包の気の助けを借りて体中を巡ります。心血は経へ絡へさらに孫に、また絡から経に、その後、肝血として蓄えられ胆気的作用で心血へと戻ります(図2)。この心包の気が血液を流す推進力と言われ、西洋医学でのドパミンを始めカテコールアミン(脳内ホルモン)に当たるものなのです。パーキンソン病ではほとんどのケースでこの膈が閉塞しています。

一膈とは横隔膜とイコールですか?それが閉じているのが膈不通…。もう少しご説明いただけますか。

水嶋：膈とは横隔膜のことですが、東洋医学的には身体の上部和下部の経絡を分ける機能的な働きがあると考えます。つまり、何らかのストレス作用にて膈が詰まる(膈不通)となり、正常の経路を流れ

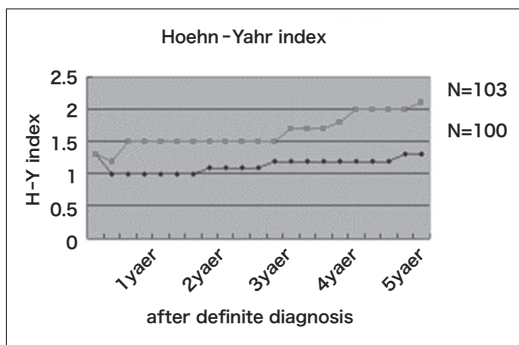


図1 パーキンソン病 (RCT)
パーキンソン病に鍼灸治療を併用後のヤール度変化

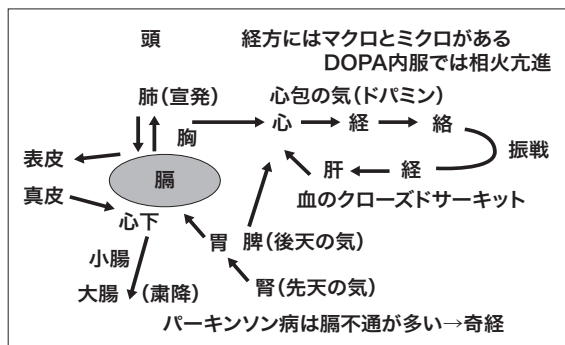


図2 江部洋一郎の「経方理論」に基づくパーキンソン病の発症機序